

## 2013 年度 日本精神分析的な心理療法フォーラム 第 2 回大会

主催 : 日本精神分析的な心理療法フォーラム  
後援 : 甲南大学人間科学研究所 ・ 京都文教大学心理臨床センター  
KIPP 桃山心理オフィス ・ NPO 法人こどもの心理療法支援会

### ご挨拶

おかげをもちまして、学会化後第二回目の「日本精神分析的な心理療法フォーラム」を開催する運びとなりました。このフォーラムは、精神分析的な心理療法に関する自由で開かれた議論を行う場として設立されました。とかく精神分析というと、堅苦しく窮屈なイメージで捉えられやすい面がありますが、身近な臨床実践の場で生かすためには、荒削りではあってもその可能性を広げる伸びやかな発想が大切ではないかと思ひます。

会としては、学会の形を取るようになりましたが、設立当初の理念をより一層追求することができればと願っております。開催のためにご尽力いただいた多くの方々に感謝いたしますとともに、今後の発展に向けてより一層のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

日本精神分析的な心理療法フォーラム 会長  
川畑 直人

#### ＜日本精神分析的な心理療法フォーラム 理事＞(50 音順・敬称略)

青木滋昌、今江秀和、金沢 晃、川畑直人、飛谷 渉、  
平井正三、広瀬 隆、藤原雪絵、宮田智基、森 茂起、山本昌輝

## プログラム

12月7日(土)

9:00 10:00                      12:30 13:30                      16:00 16:30                      19:00 19:30 20:30

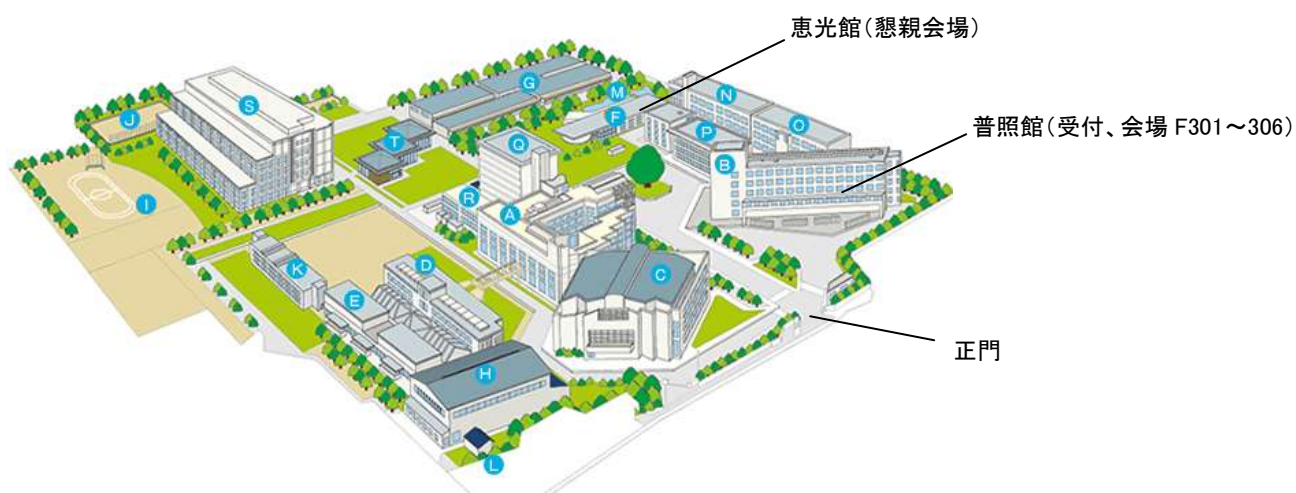
受付 普照館	分科会 1 F301	総会 F303	分科会 3 F301	休憩	全体会 1 F304 (途中 15分休憩)	休憩	懇親会 恵光館
	分科会 2 F306		分科会 4 F306				
	個人発表 1 F304		個人発表 2 F303				
			個人発表 3 F304				

12月8日(日)

9:00 10:00                      12:30 13:30                      16:30

受付 普照館	分科会 5 F301	休憩	全体会 2 F304 (途中 15分休憩)
	分科会 6 F306		
	個人発表 4 F304		

# 校内図



## 普照館 3 階 (F301~306)



12月7日(土)

◆10:00~12:30

分科会1(普照館 F301)

「症例『猫女』を読む—フランソワーズ・ドルトの臨床と精神分析理論」

症 例 概 要 説 明: 田中久美子(京都大学大学院教育学研究科)

企 画 者・話 題 提 供: 堀川 聡司(京都大学大学院教育学研究科)

話 題 提 供: 坂井 新((医)遊心会 にじクリニック、京都大学大学院教育学研究科)

話 題 提 供: 河野 一紀((医)竹村診療所)

指 定 討 論 者: 竹内 健児(法政大学学生相談室)

分科会2(普照館 F306)

「親の老化が引き起こす葛藤を精神分析はどのように扱うのか—日米文化差を踏まえた対人関係論的な考察—」

話 題 提 供 者: Robert B. Shapiro, Ph. D.(William Alanson White Institute)

指 定 討 論 者: 辻河 昌登(兵庫教育大学)

指 定 討 論 者・通 訳 者: 松本 寿弥(京都精神分析心理療法研究所、KIPP 精神分析協会)

企画者・司会者・指定討論者: 川畑 直人(京都精神分析心理療法研究所、KIPP 精神分析協会)

個人発表1(2演題)(普照館 F304)

<司会>金沢 晃(神戸市外国語大学、NPO 法人子どもの心理療法支援会)

「治療プロセスの強度としての『無限』—レヴィナスの『忍耐』をもとにしたピオンの『無限』概念の一解釈—」

発 表 者: 塩飽 耕規(遊心会にじクリニック)

「ある『境界性パーソナリティ障害』における抑圧の構造」

発 表 者: 西村 則昭(仁愛大学)

◆12:30~13:30

総会(普照館 F303)

昼休みに総会を行います。会員の方はご出席ください。

◆13:30~16:00

分科会3(普照館 F301)

「心理臨床家として生きていくことと精神分析を学ぶこと」

司 会 ・ 演 者: 北川 清一郎(神奈川大学心理相談センター)

企 画 者 ・ 演 者: 橋本 貴裕(明治学院大学学生相談センター、こころのドア船橋)

演 者: 鳥越 淳一(日本橋学館大学、南青山心理相談室)

演 者: 吉沢 伸一(ファミリーメンタルクリニックまつたに)

指 定 討 論 者: 茂市 耕平(池袋カウンセリングセンター)

指 定 討 論 者: 青木 滋昌(名古屋精神分析研究所、ニューヨークNPAP精神分析研究所)

分科会4(普照館 F306)

「学生相談に生かす対人関係/関係精神分析的視点—『playfulness』に注目して」

発 表 者: 伊藤 未青(近畿大学保健管理センター、KIPP 精神分析協会)

発 表 者: 野原 一徳(愛知淑徳大学学生相談室、KIPP 精神分析協会)

発 表 者: 松本 寿弥(同志社大学カウンセリングセンター、KIPP 精神分析協会)

指 定 討 論 者: 鈴木 健一(名古屋大学学生相談総合センター、KIPP 精神分析協会)

司 会 者・指 定 討 論 者: 今江 秀和(広島市立大学保健管理室、KIPP 精神分析協会)

個人発表2(2演題)(普照館 F303)

<司会>広瀬 隆(帝塚山学院大学、北大阪こころのスペース)

「双方エナクトメントの行く末と、扱い方の1思案」

発 表 者: 清川 雅充(柏崎厚生病院)

「治療者の正直さが問題になる場面と、治療者の中立性の危機」

発 表 者: 的場 充憲(甲南大学大学院)

個人発表3 (2 演題) (普照館 F304)

<司会> 飛谷 渉(大阪教育大学保健センター)

「総合病院精神科で行われた精神分析的心理療法の効果」

発表者: 手塚 千恵子(大阪市総合医療センター)

「慢性統合失調症の心理療法」

発表者: 小高 史歩(札幌佐藤病院 臨床心理科)

◆16:30~19:00

全体会1(普照館 F304)

「精神分析的臨床の担い手は誰か; 職場と職種を意識した対話」

司 会: 川畑 直人(京都精神分析心理療法研究所、KIPP 精神分析協会)

シ ン ポ ジ ス ト: 池田 真典(特定非営利活動法人 ICCG 多機能型事業所 どりー夢共同作業所)、  
井口 由子(国立総合児童センター こどもの城)

指 定 討 論: 青木 滋昌(名古屋精神分析研究所、ニューヨークNPAP精神分析研究所)  
今江 秀和(広島市立大学保健管理室、KIPP 精神分析協会)

12月8日(日)

◆10:00~12:30

分科会5(普照館 F301)

「学校と精神分析の邂逅~精神分析から特別支援教育を考えてみる」

発 表 者: 植木田 潤(宮城教育大学特別支援教育講座)

企 画 者、発 表 者: 上田 順一(大倉山子ども心理相談室)

発 表 者: 人見健太郎(みとカウンセリングルームどんぐり)

指 定 討 論 者: 堀内 毅(猿島厚生病院)

分科会6(普照館 F306)

「対人関係論の鍵概念を取り上げる③-『エナクトメント』への気づきと新しい体験-」

企 画 者: 宮田 智基(関西カウンセリングセンター、KIPP 精神分析協会)

話 題 提 供 者: 野原 一徳(愛知淑徳大学学生相談室、KIPP 精神分析協会)

話 題 提 供 者: 今井たよか(あるく相談室京都、KIPP 精神分析協会)

話 題 提 供 者: 長川 歩美(A&C 中ノ島心理オフィス、KIPP 精神分析協会)

指 定 討 論 者: 川畑 直人(京都精神分析心理療法研究所、KIPP 精神分析協会)

司 会 者: 馬場 天信(追手門学院大学、KIPP 精神分析協会)

個人発表4 (2 演題) (普照館 F304)

<司会> 平井 正三(御池心理療法センター、NPO 法人子どもの心理療法支援会)

「人形遊び技法における面接者の介入による児童の反応の推移

~面接者と児童の相互作用から捉えた反応の共同構築過程~」

発表者: 石谷 真一(神戸女学院大学)

「モーニングワークと分離の事実」

発表者: 疋田 基道(クリニックソフィア)

◆13:30~16:30

全体会2(普照館 F304)

「エナクトメントの臨床的取り扱いとその意義」

司 会: 山本 昌輝(立命館大学)、  
金沢 晃(神戸市外国語大学、NPO 法人子どもの心理療法支援会)

シ ン ポ ジ ス ト: 皆川 英明(草津病院)ークライン派の立場からー  
富樫 公一(甲南大学・栄橋心理相談室)ー現代自己心理学・関係論の立場からー

指 定 討 論: 宮田 智基(関西カウンセリングセンター、KIPP)ー対人関係学派の立場からー  
広瀬 隆(帝塚山学院大学、北大阪こころのスペース)ーユング派の立場からー

## 抄録

### ◆全体会

全体会1 12月7日(土) 16:30~19:00(普照館 F304)

#### 「精神分析的臨床の担い手は誰か; 職場と職種を意識した対話」

司 会 : 川畑直人(京都精神分析心理療法研究所、KIPP 精神分析協会)

シンポジスト: 池田真典(特定非営利活動法人 ICCG 多機能型事業所 どりー夢共同作業所)、  
井口由子(国立総合児童センター こどもの城)

指 定 討 論: 青木滋昌(名古屋精神分析研究所/ニューヨークNPAP精神分析研究所)、  
今江秀和(広島市立大学保健管理室、KIPP 精神分析協会)

かつて Freud は、lay analyst をめぐる議論の中で、精神分析の担い手の条件は、医師であるかどうかではなく、精神分析の訓練を受けたかどうかが決め手となることを明言しました。Freud の見解に忠実に従うならば、今後、日本において精神分析的な心理療法の訓練が普及し、開業ベースの精神分析プラクティスが行われるとき、その担い手は誰なのでしょう。医師なのか、臨床心理士なのか、あるいは精神保健福祉士や看護師はどうか。

この問題について考えるために、このシンポジウムでは、精神保健福祉士であり、ラカン派の観点から、精神障害者の作業所において臨床実践を行っている池田真典氏と、国立総合児童センターにおいて、子どもの精神分析的な心理療法や家族の相談の現場に身をおきながら、心理職と他職種を束ねる仕事を行っている井口由子氏から、職場と職種を意識した話題提供をしていただきます。

指定討論には、本フォーラム理事である、今江秀和氏と青木滋昌氏があたります。今江氏は、日本で精神分析的な心理療法の訓練を受けた臨床心理士として、本会の多くの会員と同じ視点から討論してもらえます。青木氏は、米国の精神分析研究所(NPAP)で資格取得後、日本で開業ベースの精神分析臨床、分析的な心理療法家の訓練を行っています。NPAP は lay analyst の議論の発端となった Theodor Reik が開設した研究所であり、法律家や芸術家など精神保健専門職以外にも訓練を施してきました。

精神分析臨床がどのように根付いていくのか、不透明な部分が多い日本の現実を踏まえ、フロアの皆様とともに、将来を見通した有意義な議論ができることを願っています。

全体会 2 12月8日(日) 13:30~16:30 (普照館 F304)

## 「エナクトメントの臨床的取り扱いとその意義」

司 会 : 山本昌輝(立命館大学)、  
金沢 晃(神戸市外国語大学、NPO 法人子どもの心理療法支援会)  
シンポジスト: 皆川英明(草津病院)ークライン派の立場からー  
富樫公一(甲南大学・栄橋心理相談室)ー現代自己心理学・関係論の立場からー  
指 定 討 論: 宮田智基(関西カウンセリングセンター、KIPP)ー対人関係学派の立場からー  
広瀬 隆(帝塚山学院大学、北大阪こころのスペース)ーユング派の立場からー

精神分析的心理療法の中核は、クライアントの転移をワークスルーすることにある。転移理解には、クライアントが語る内容や夢などの「象徴水準」の素材理解だけではなく、クライアントの転移によって影響を受ける、セラピストの逆転移とその行動化といった「非象徴水準」の素材についての内省が必要不可欠である。これは、セラピー状況をクライアントの内的世界の実演(エナクトメント)と見なす見方であり、転移と逆転移が入り混じった形で、クライアントの内的世界が非象徴的な行為の水準で実演されることを捉えようとする視点でもある。

精神分析諸学派において、「エナクトメント」という概念は共有されつつあるが、その理解の仕方や取り組み方には、共通点とともに相違点も認められる。また、ユング派の「コンステレーション」という概念は、「エナクトメント」の考え方も近接にあるかもしれない。

この企画では、クライン派、現代自己心理学・関係論の立場からケースプレゼンテーションを行い、対人関係学派、ユング派の立場から指定討論を行うことで、エナクトメントをどのように取り扱うかを検討し、それぞれの臨床思考の共通点と相違点を明確にすることを目的とする。

## ◆分科会

分科会1 2013年12月7日(土) 10:00~12:30 (普照館 F301)

タイトル:「症例『猫女』を読む—フランソワーズ・ドルトの臨床と精神分析理論」

症例概要説明: 田中久美子(京都大学大学院教育学研究科)  
企画者・話題提供: 堀川聡司(京都大学大学院教育学研究科)  
話題提供: 坂井新((医)遊心会 にじクリニック、京都大学大学院教育学研究科)  
話題提供: 河野一紀((医)竹村診療所)  
指定討論者: 竹内健児(法政大学学生相談室)

### 企画趣旨

Dolto, F.は「猫女」と呼ばれる患者との精神分析症例を報告している。この症例は、患者の状態像においても、治療プロセスにおいて非常に興味深いもので、Freud, Sの五大症例に匹敵するほどの好奇心を掻き立てさせる。

本企画では、この症例のより深い探究、およびそれに関連の深い精神分析理論の検討を目的としている。叩き台となる三つ話題提供を提示した後、指定討論およびフロアも交えた活発なディスカッションを行う予定である。

なお、この事例については当日も概要は発表するが、事前に症例の本文をお読みになされている方が議論に参加しやすくなると思われる(Dolto, F. (1985). *Séminaire de psychanalyse d'enfants 2*. Paris: Seuil. pp.28-55)。個別に連絡を頂ければ企画者による試訳をお送りさせて頂く(horiksatoc アットマーク yahoo.co.jp)。

### ■症例「猫女」の概要

田中久美子(京都大学大学院教育学研究科)

この症例は、1950年頃から始められ約3年半の過程を経て終結した、週3回カウチ設定による精神分析治療である。患者はブルジョワ家庭に生まれたものの、ロシア革命によって祖国を追われた過去をもつアレクサンドラという名の52歳の寡婦女性である。彼女がDolto, F.の元を訪れた直接的な主訴は、パートナーとの性交を求めていながらもそれが生理的に叶わない「膣痙攣」であったが、彼女にはオス猫に対する恐怖症もあった。それはオス猫が一匹でも目の前を通ると、首が顔ほどの大きさに膨れ上がりパニック発作を起こすというものである(これが症例の命名の由来となっている)。

この女性の生育史は数多くの性的な外傷体験に彩られており、それは分析の過程を通して断続的に想起されていった。例えば12歳時の亡命の際は、祖母がアレクサンドラの膣の中に小切手が隠すということがあった。また3歳半の時には、激情的な父親の怒りをかかった彼女が、当時飼われていたメスの子犬とその立場を逆転させられるという体験もした。分析の中で彼女が過去の多くの出来事を想起し語る中で、彼女の膣痙攣は完全に治癒し、男性と性関係を持てるまでに至った。

当日はこの詳細な治療記録を簡潔にまとめ発表する。

キーワード: 恐怖症、膣痙攣、フランソワーズ・ドルト

### ■「猫女」のエディプス・コンステレーション

堀川聡司(京都大学大学院教育学研究科)

この話題提供では、患者の有していた心的メカニズムについて、とりわけエディプス・コンステレーションの視点から論じていく。

アレクサンドラが患っていた膣痙攣は、性器期的なリビドーの退行が生じ、膣が肛門の役割を演じることによって生じた症状だったと解釈される。そしてその背景には近親姦を恐れる彼女のエディプス構造があり、そこにおいてアレクサンドラがメス犬に同一化していたと考えられる。つまりメス犬である自分は、オス猫である父親と交わることは許されないのである。ところで、治療が終結し、彼女が最初に性関係を持つことができたのは、オス犬と称された男性であったことも興味深い。考察では、彼女が幼少期に盗んだ「柄に犬の頭がついている雨傘」を結合両親像と関連づけて、彼女を取り巻く動物に置き換えられたエディプス・コンステレーションをより明細に記述してみたい。

キーワード: エディプス、リビドー、結合両親像

### ■分析家の“受け身性”と“沈黙”について

坂井新((医)遊心会 にじクリニック、京都大学大学院教育学研究科)

この症例における治療者の態度は「Freud流の古典的分析」に従ったものであり、セッションではほとんどの時間、沈黙が流れていたと記されている。Freud流の古典的分析とは、患者がこれまで抑圧してきた(無意識



的なものを(意識化し)、より深い洞察を目指して、患者の連想を促すものと要約できるだろう。その際治療者は、必要以上の説明は加えず、ひたすらに患者に話をさせ、「慎重に症状の解決や願望の翻訳を話さないように」する(Freud, 1913)。

ドルトは以上のような Freud の理念に忠実であり、この症例における転移関係や、その解消過程はさほど明確にされてない。むしろ分析家が患者の連想を「待つ」という“受け身性”が際だっており、二人の間では、それに先立つ形で“沈黙”が訪れる。

当日は、この分析がなされた当時のフランスにおける精神分析界の事情も加味しつつ、分析家の“受け身性”について、さらには、現代の精神分析・心理臨床において重要かつ深淵なテーマとなりうる“沈黙”について、一つの視点を呈示する。

キーワード: 受け身性、沈黙、古典的精神分析

#### ■Lacan, J.の恐怖症論より

河野一紀((医)竹村診療所)

Lacan は 1956-57 年のセミナーにおいて、Freud の症例 Hans を検討しつつ、エディプス・コンプレックスの構造論的読解を試みている。そこでは、対象の欠如のシニフィアンによる構造化と同時に、失われた対象としての対象の再発見のプロセスが問題となっていた。対象欠如の三様態をフラストレーション、剥奪、去勢として Lacan は位置づけ、その変遷からエディプスを再考している。そして、恐怖症は剥奪として特徴づけられる欠如との関連で取り上げられた。恐怖症は不安の前方に構築されるという Freud の考えを参照しつつ、Lacan は恐怖症の対象がシニフィアンであり、恐怖症は構造における欠如に由来する不安に対する障壁として機能するという考えを示した。また、恐怖症で問題となる剥奪という欠如とは、去勢の論理へと回収されない欲動の作動、享樂というLacan 的概念との関連において検討されねばならないだろう。周知のように、身体の問題は、Hans と母親や妹といった女性たちとのあいだで生じた出来事と不可分であった。当日の発表では、以上の点を踏まえたうえで、Dolto の症例猫女について考察を深めていきたい。

キーワード: シニフィアン、不安、身体

#### ■指定討論

竹内健児(法政大学学生相談室)

ドルトは、養成中の精神分析家・心理療法家を対象に、月に 2 回、15 年間に渡ってセミナーを行っていた。その記録である『子どもの精神分析セミナー』(全 3 巻、未邦訳)においてドルトは、参加者の呈示する事例に切れの良いコメントをするとともに、自身による症例を多数報告している。「猫女」は、その第 2 巻第 2 章「恐怖症」で取り上げられているもので、全 3 巻を通して、かなり詳細に語られている症例である。当日は、話題提供者の話を受けて、この症例について多角的な視点から議論を深めたい。

キーワード: フランソワーズ・ドルト、恐怖症、臆瘻攣

分科会 2 2013年12月7日(土) 10:00~12:30 (普照館 F301)

タイトル:「親の老化が引き起こす葛藤を精神分析はどのように扱うのか

— 日米文化差を踏まえた対人関係論的な考察 —

話 題 提 供 者: Robert B. Shapiro, Ph. D. (William Alanson White Institute)

指 定 討 論 者: 辻河昌登 (兵庫教育大学)

指 定 討 論 者・通 訳 者: 松本寿弥 (京都精神分析心理療法研究所)

企画者・司会者・指定討論者: 川畑直人 (京都精神分析心理療法研究所)

キ ー ワ ー ド: 親の老化、羨望、嫉妬

### 企画趣旨

本分科会の話題提供者である Robert B. Shapiro 氏は、米国のウィリアム・アランソン・ホワイト研究所のシニア・アナリストであり、発達論的な観点から精神分析臨床にアプローチしている。この分科会では、生涯発達の後期において、親の老化そして死をめぐる再燃してくる羨望、嫉妬、競争心といった感情について論考を行う。話題提供では、こうした状況にあったいくつかのケースがとりあげられ、転移の問題、そして対象失の問題とともに考察が加えられる。

この分科会では、この Shapiro 氏の話題提供に対して、日本文化の視点を加味しながら、兵庫教育大学の辻河昌登、京都精神分析心理療法研究所の松本寿弥、川畑直人の3名が指定討論を行う。会場全体の討論では、日本とアメリカの文化の違いが、この問題にどのような影響を及ぼすのかについて話し合えることを期待している。

### ■話題提供

Robert B. Shapiro, Ph. D. (William Alanson White Institute)

羨望、嫉妬、競争心といった感情は、人間関係のいたるところで存在している。近年、多くの臨床事例を通して、こうした感情にまつわる強い葛藤が、親の老齢化、あるいは親の死をめぐる再燃してくるということに気がつき始めた。こうした葛藤は、防衛が取り外されているが故に、かつて以上に激しく、際立った形で突出してくることがある。いくつかの事例を紹介しつつ、転移と対象喪失について触れ、さらにひとつのケースを念入りに見ることによりこの問題について追求してみたい。

### ■指定討論

辻河昌登 (兵庫教育大学)

エリクソンの壮年期の「世代性 (generativity)」や老年期の「祖父母的世代性 (grand-generativity)」といった観点から、世話役の世代間伝達について論じてみたい。また、フェアバーンや家族療法家が論ずる対象(親)への「忠誠心 (royalty)」なども考察に含めるつもりである。

### ■指定討論者

松本寿弥 (京都精神分析心理療法研究所)

日本で暮らす外国人・日本人の事例に基づきながら、親の老齢化や喪失についての、文化的特徴や異文化間葛藤の問題などに触れながら考察をすすめる。

### ■指定討論

川畑直人 (京都精神分析心理療法研究所)

日本の家制度によってこのような葛藤がどのような形で現れやすいのかについて、臨床事例を含む経験を踏まえて論じる。特に、家制度における女性の位置づけに注目し検討する。

タイトル:「心理臨床家として生きていくことと精神分析を学ぶこと」

司 会	・ 演 者:	北川清一郎(神奈川大学心理相談センター)
企 画 者	・ 演 者:	橋本貴裕(明治学院大学学生相談センター/こころのドア船橋)
演 者		者: 鳥越淳一(日本橋学館大学、南青山心理相談室)
演 者		者: 吉沢伸一(ファミリーメンタルクリニックまつたに)
指 定 討 論	者:	茂市耕平(池袋カウンセリングセンター)
指 定 討 論	者:	青木滋昌(名古屋精神分析研究所、ニューヨークNPAP精神分析研究所)
キ ー ワ ー	ド:	「心理臨床家としての葛藤」、「精神分析訓練」、「アイデンティティ」

企画趣旨

本企画は、臨床家として生きていく上で生じる不安や葛藤に焦点を当てる。精神分析を学び、精神分析的臨床を実践する中で、臨床家自身の不安や葛藤をいかに抱えていくかは臨床家にとって大きなテーマである。この学びと実践は臨床家となる上での支えにもなれば時に苦痛ともなるが、臨床家の前に立ち現われるその意味を迫り続けることが重要だろう。

演者らは若手の臨床家が抱える困難さの研究を行っている。今回はその中から抽出された、臨床実践や生きる上での主な不安や葛藤について、経験年数 10 年前後の演者らが話題提供を行い、その困難さと未だ向き合い続けている立場から精神分析とのパーソナルな向き合い方を提示する。それをもとに若手とベテランの指定討論者と討論を行い、臨床家として成長していくプロセスを検討したい。

若手の先生方はもちろん、臨床家のアイデンティティ、臨床家の育成に関心をお持ちの先生方とも対話ができればと考えている。

■「個別ケースを行う上での不安」

北川清一郎(神奈川大学心理相談センター)

初心者の頃は「良い治療ができるのか?」「良い治療者になれるのか?」「どのようにアセスメントしたら良いか分からない。」「どのように対応したら良いのか分からない。」「どのように精神分析に導入したら良いのか分からない。」というような悩みや心配を抱えながらケースに当たっていることだろう。初心者はスーパーヴィジョンを受けている人も多し、そこで回答を得ることもあるかもしれない。しかし、そうであったとしても、後付のようなものであり、今ここで患者と対面している時には誰かに頼ることはできず、自分自身でやり抜くことしかできない。例えば判断が間違ふことがあると、対応が上手くできないことがあるかもしれないが、それはその場で初心者ながらも自分の考えや信念で行ったことであり、誰にも責められるものではない。良く言えば臨床感覚と言えなくもない。もちろん、それには責任が伴うことであり、避けることなくその責任を引き受けねばならない。初心者はケースを行う上で不安である。それは経験不足、技術不足から来るものが確かに多い。それを差し引いたとしても、患者と対面する際の根本的な不安もそこに含まれている。それらの不安と責任を放り出さずに、抱えながらケースを行うことに意味があるのではないだろうか。

■「職場での実践にまつわる不安や葛藤～職場で役に立つ心理士になることと精神分析を学ぶこと～」

橋本貴裕(明治学院大学学生相談センター、こころのドア船橋)

職場で役に立つ人として認知されるかどうかは、私たちが社会人として生きていく上で最も重要なことだろう。そして専門職の場合、その専門性を発揮することを当然求められる。しかし、精神分析的理解や実践によって専門性を職場で発揮しようとする場合にはいくつかの壁に直面しやすいように思う。精神分析を学ぶことに時間がかかることや週 1 回以上の頻度で精神分析的な心理療法ができるケースが少ないこと、他職種やスタッフへの説明が難しいことなど様々な困難が挙げられるだろう。とりわけ、精神分析という枠組みの中で訓練して身につけることと、精神分析的な心理療法以外のいわゆる日常臨床で求められることはかけ離れていると感じることが挙げられないだろうか。その狭間で意識的無意識的に苦悩することがあるように思うが、その葛藤を抱え、職場でどのように適応していくかについて模索することは、役に立つ臨床家と認知される上でも重要な意味を持つように思う。そこでは「精神分析」と「日常臨床」とどのような関係でつながっているのかを考えることが鍵とな当日は私自身の体験を素材として、職場で役に立つ臨床家とはどういう人間なのか、そして臨床家にとって精神分析を学ぶことはどういった意味を持つのか、そこでの苦悩の意味や臨床家としての成長について検討したい。

■訓練分析にまつわる葛藤: 私的好奇心と公的システムの間で構築される分析家のアイデンティティ

鳥越淳一(日本橋学館大学、南青山心理相談室)

治療者自身が精神分析を受けることは今も昔も精神分析の訓練において最重要事項として位置づけられている。セミナーや研究会、書籍や論文で描かれている事例の精神分析的展開は大変刺激的であり、自己理解

に対する好奇心から精神分析を自分自身が受けてみたいと思う初学者は決して少なくないように思う。しかし、実際に訓練として分析を受け始めると、それは一種の職業訓練でもあり、訓練の修了(認定の取得)といった自己理解とは別次元の目的が現れてくる。この場合、精神分析は自己理解の手段であるため、その過程は個人によって異なっていて当然であるとの認識と、資格や認定の取得という訓練上の性質から公的な(非個人的な)過程であり、あるべき訓練の形が存在するとの認識が併存することになる。

発表者は、自身の訓練経験を踏まえながら、訓練を受ける臨床家にとって、こうした葛藤は不可避のものであるが、精神分析を実践する者としてのアイデンティティはその葛藤の中でしか築くことができないのではないかという見解を呈示する。当日、指定討論者の先生やフロアとのディスカッションを通して、私たちはどのように訓練分析の中で専門家という public な側面と一個人としての private な側面に向き合えるかを探索・検討できればと思う。

#### ■心理職・臨床家として生きる不安—巻き込まれることと生きること—

吉沢伸一(ファミリーメンタルクリニックまつたに)

私は、自らが初心のときに抱いていた心理職あるいは臨床家として生きる不安を、10年たった今、あらためて見直してみたいと思う。大学院ではじめて担当したケース、はじめて受けたスーパーヴィジョン、はじめての職場、はじめての学会発表など、はじめての第一歩を踏み出すことを巡る不安や恐れ、その葛藤と乗り越え方、さらにそこから見える私なりの選択や決断をひとつの素材として考察してみたい。

その中で私は、「巻き込まれること」という視点を基礎に考えたいと思う。クライアントの情緒や内的世界に巻き込まれること、大学院や職場の力動関係に巻き込まれること、臨床心理士育成という社会的な大きなうねりに巻き込まれること、自らの情緒に翻弄され巻き込まれること、私は多くの葛藤や思惑に巻き込まれ、その中で自分を見失いそして再び発見し、今の私でいる。私にとっては、その過程で精神分析と出会い学び、その観点で臨床を実践することが不可分であった。私が精神分析に巻き込まれたと言えるかもしれない。巻き込まれるとは、受身的な意味あいだが、そこを生き抜くためには、能動的な動きに転換していく必要がある。その転換過程での精神分析的な実践と訓練が私には酷く苦しいものであったが、今では私を支えている。

発 表 者: 伊藤未青(近畿大学保健管理センター、KIPP 精神分析協会)  
発 表 者: 野原一徳(愛知淑徳大学学生相談室、KIPP 精神分析協会)  
発 表 者: 松本寿弥(同志社大学カウンセリングセンター、KIPP 精神分析協会)  
指 定 討 論 者: 鈴木健一(名古屋大学学生相談総合センター、KIPP 精神分析協会)  
司 会 者・指 定 討 論 者: 今江秀和(広島市立大学保健管理室、KIPP 精神分析協会)

#### 企画趣旨

精神分析は開業形式による実践という、極めて私的な営みから始まりました。そしてそこで得られたアイデアや理解は、心理的援助が求められる様々な臨床領域に取り入れられてきました。この分科会はふだん学生相談という場で臨床実践を行っている発表者たちが、自らの臨床を精神分析的な視点で捉えなおそうとするものです。今回は「playfulness」をキーワードに議論していきます。

学生相談には他の臨床領域とは異なる性質が存在します。それは例えば、相談室が大学の中に組織的にも物理的にも位置づけられることが挙げられます。勤めている大学の性質や文化といった文脈も考慮する必要があります。基本的には最長でも4年間という時間の限られたなかで、主に青年期にいる人々を援助していくことになります。このようなセッティングのなかで、いったい何が援助的かを考えていくことは可能性をはらんだ創造的な過程であると考えられるでしょう。

#### ■伊藤未青(近畿大学保健管理センター、KIPP 精神分析協会)

大規模校に入学した学生は、これまでとは大きく違う環境でより主体性を発揮して学生生活を送る必要があります。しかし、過去のいじめや不登校、対人関係での上手くいかなさなどの体験が未整理の状態、大学生活への適応に困難をきたしているケースに比較的多く出会います。限られた時間の中で私が出来ることを考えていると、学生の持つ悩みの深さや残された時間の短さに一緒に眉間にしわを寄せて、腕を組んで悩んでいる自分自身の姿に気づきます。ウィニコットは精神療法での患者と治療者の一緒に遊んでいる領域の創造性に言及する中で、「遊ぶことが起こりえない場合には遊べる状態へ導く努力をすること」と述べています。これまでの人生で十分に遊んでこられなかったCLの傷つきに丁寧に触れ、そこからわきあがるTHの感覚を捉え、CLが持っている創造性に両者が注意を向けるようになるためにどのような「遊び方」をしていけるのでしょうか。事例を提供し、THとCLとの間にどのような「遊び」が起こっていたのか、いなかったのか、という点を振り返り、学生相談でのより援助的なやりとりについて考えてみたいと思います。

キーワード: 学生相談、創造性、遊び

#### ■野原一徳(愛知淑徳大学学生相談室、KIPP 精神分析協会)

学生相談で臨床を行っている、発表者は面接にもよりますが遊びの雰囲気を作れるよう意識していたり、ユーマアをよく用いていることに気づきます。これは何だろう、というのが今回の発表の出発点です。Winnicott(1971)が患者とセラピストの両方による遊びによって心理療法が成立する、と述べているように、セラピストも遊んでいることが重要であるという考えがあります。その一方で、一般にセラピーにおけるセラピスト側の関与を考えたときに、プレイフルであるよりは真面目であるほうがより受け入れられるということがあります(Hoffman,1992)。それは何より、「誘惑の危険、操作の危険、強要の危険さであり、Daniel Stern(1985)が『誤調律』と『情緒的窃盗』と呼んだものの危険が明らかにある」(Ehrenberg,1990)からです。

発表者はこのような問題を、学生相談という設定を加味したうえで考えたいと思います。援助内容も援助手段も多様ななかで学生相談における個人面接は、青年期にある学生のニードとそれに応答しようとするカウンセラーとによって、相互的に構築していくことになります。当日は支持的に関わった事例を提示したうえで、考察を加えます。

キーワード: 遊ぶこと、面接構造、青年期

#### ■松本寿弥(同志社大学カウンセリングセンター、KIPP 精神分析協会)

Ehrenberg(1990)が指摘するように、playfulnessは臨床場面やCIとの治療関係を活性化する契機となりますが、同時にそれは攻撃性の現れとして破壊的に作用する、あるいは攻撃を回避するために防衛的に用いられることがあります。発表者は外国人留学生との面接過程を通して、治療関係におけるplayfulnessの意味・意義について考えます。特にCIの防衛的なplayfulnessに対するThのplayfulな介入に注目し、それがもたらす不安の軽減について、そしてThがthoughtfully playfulであることの大切さについて検討します。最後にplayfulnessをengagementという視点から考察したいと考えています。

キーワード: 精神分析的エンゲージメント、異文化カウンセリング、対人不安

タイトル:「学校と精神分析の邂逅～精神分析から特別支援教育を考えてみる」

発 表 者: 植木田潤(宮城教育大学特別支援教育講座)  
企 画 者、発 表 者: 上田順一(大倉山子ども心理相談室)  
発 表 者: 人見健太郎(みとカウンセリングルームどんぐり)  
指 定 討 論 者: 堀江里美(神経科クリニック こどもの園)  
指 定 討 論 者: 堀内 毅(猿島厚生病院)

企画趣旨

多くのクライン派臨床家が指摘しているように「学び」は認知過程を育み、同時に情緒過程をも育んでいる。その学びの可能性を最大限に引き出す役割を担う学校は、知識や技能を習得する場であることに留まらず、情緒過程の垣根にもなっている。われわれは昨年フォーラムで、学校という場における教育実践と精神分析的な心理療法の邂逅が何を産み出すのかについて論じた。今年フォーラムでは、学校教育現場が抱える喫緊の課題、特別支援教育に対し精神分析がなし得ることについて考えてみたい。情緒的な体験世界という切り口から学校という場を眺めると、二つの心的体験世界から構成されていることが分かる。一方は児童生徒の体験世界であり、もう一方は教職員の体験世界である。この二つの体験世界は相互に交わりつつ、個と全体という葛藤や防衛を紡ぎ出している。こうした場に臨む精神分析的セラピストがどのように特別支援教育に向き合っていくかを論じたい。

■知的障害児の教育実践に対して精神分析的な視点が寄与しうる可能性

植木田潤(宮城教育大学特別支援教育講座)

一般には未だ区別が明確ではないかも知れないが、従来の特殊教育が障害のある子どもに特別な場で指導や支援を行う「場を分ける」教育であったのに対して、特別支援教育では場を分けることよりも、障害のある子どもの「一人一人の教育的ニーズに応じた」指導や支援を行うことに力点が置かれるようになった。こうした流れを受けて、現在の特別支援教育の主たるステージは、知的には遅れのない発達障害の子どもが多く在籍している通常の学校・学級にシフトしつつある。しかし、だからといって、従来の特殊教育の対象であったより障害の重い子どもたちがいなくなったわけではない。一口に障害のある子どもと言っても、その実態はさまざまであり、文部科学省は「共生社会を目指したインクルーシブ教育システムの構築」を進めつつも、『多様な学びの場』という言葉を用いて、従来から在る、より障害の重い子どもたちに対して必要な指導や支援を行う特別支援学校の役割の重要性も強調している。そこで、本発表においては、演者が精神分析的な視点を持って臨んだ、特別支援学校の教育実践場面における観察と教職員に対するコンサルテーション活動を通して、子どもの発達を支援するというのは本来のどのような性質のものであるのかを、特に知的障害のある子どもの事例を通じて検討し、精神分析的な視点を持つことが知的障害のある子どもの発達に寄与しうる可能性を探ってみたい。

キーワード: 知的障害、参与観察、発達の支援

■精神分析的視点が特別支援教育になし得ること

上田順一(大倉山子ども心理相談室)

学校教育法の制度改正により、学校では通常学級も含め学校全体で特別支援教育が実施されている。通常学級に在籍する障害のある子どもたちは、小人数指導や取り出し指導、支援員の配置によって支援されている。また障害の状態によっては通級指導を受けている。一方、特別支援学級に在籍する障害のある子どもたちも、障害の種別ごとに個別の指導を受けながら、交流および共同学習のため通常学級にも在籍している。このように文科省では、個別の教育支援計画、指導計画の充実だけでなく、障害のある子どもとない子どもとの交流や共同学習も重要視している。スクールカウンセラーは、昨今の学校における特別支援教育の位置づけに呼応して、特別なニーズがある子どもたちに関する指導助言を教職員から求められる事も多い。ただスクールカウンセラーは勤務時間の縛りやその他の相談活動もあり、個別の教育支援計画や指導計画に協力できる時間は多くはない。演者は、スクールカウンセラーが特別支援教育の一端に関わることが出来るとしたら、交流や共同学習という場に立ち現れる様々な情緒的交流を観察し、その理解を教員に伝えること、つまり精神分析的視点を提示することにあるのではないかと思う。発表では、障害のある子とない子の交流や共同学習の場でのビネットを用いて、精神分析的視点と特別支援教育の邂逅を論じてみたい。

キーワード: スクールカウンセラー、精神分析、特別支援教育

■“考えること”が困難な教員たちとスクールカウンセラー

—「発達障害」というレッテル貼りとその解消に焦点を当てて—

人見健太郎(みとカウンセリングルームどんぐり)

A 高校は、普通科高校と実業系高校が統合され、総合的な学びができる高校として期待されていた。しかし、

普通科科目の教員と実業系科目の教員は価値観の違いから対立し、受験者数も定員割れを起こす状態となった。そして、成績が悪い生徒たち、言い換えれば小中学校で扱いに困る発達障害を思わせる生徒たちの進学先となった。問題行動を起こすと、「学校に向かない生徒」とされ、“考えなし”に安易な進路変更が行われ、地域では「面倒見の悪い学校」と悪評が立った。その学校の教員ということが、教員自身の自尊心も低めているようであった。そのような状況下で、中学時代から窃盗を繰り返し、「発達障害の疑い」で児童相談所の指導を受けたこともある男子生徒が、再び窃盗事件を起こした。生徒指導主事から SC への面接依頼があり、何度目かの面接後、カンファレンスとなった。「学校をやめさせるため」の言質を取られるような圧力の中、当該生徒の「イニシャルメモリー」を一緒に自由連想するという試みを行ったところ、“考えてみる”ことの意義が共有されて、徐々に状況が変わった。そのプロセスを中心に、精神分析的な視点を持った SC の機能を論じたい。

キーワード:「考えること」と「考えないこと」、発達障害というレッテル貼り、カンファレンス

## ■指定討論

堀江里美(神経科クリニック こどもの園)

適応指導教室で心理士として勤務しているが、不登校児としてあらわれる子どもたちの中には、発達障害あるいはその疑いがあることも少なくない。“発達障害”としての対応を保護者に求められたり、また、学校の教職員からその対応方法の助言を求められることも多く、そこには子どもたちが何を感じ、考えているのかが取り残されてしまうこともあるように感じる。また、混乱した家族や学校組織の中で、どう関係性を築き、精神分析的な理解を、どのタイミングで、どのように伝えていくと、それが子どもたち自身の世界とつなげていけるのかなどを考えていきたい。

キーワード:関係性

## ■指定討論

堀内毅(猿島厚生病院)

私が勤務する病院でも外来・入院を問わず個人心理療法が医師よりオーダーされるが、その患者の中には例えば発達障害(自閉症、アスペルガー障害)と診断された方、あるいはそれを疑われる方も少なくない。現在私がお会いするのは、その全ての方々が既に学校を卒業された後の成人であり、最も悩み苦しむ時間の一つかもしれない学校生活での体験は生育歴の一部分として語られる。したがって、患者がどのように学校生活を体験してきたのか(どのような体験として残っているのか)、私はセラピストとして関心を向け続けているし、また遡って学校生活の体験にスクールカウンセラーはどうありうるのかについても大いに学びたいところである。

キーワード:スクールカウンセラー、生育歴、発達障害

企	画	者:	宮田智基(関西カウンセリングセンター、KIPP 精神分析協会)		
話	題	提	供	者:	野原一徳(愛知淑徳大学学生相談室、KIPP 精神分析協会)
話	題	提	供	者:	今井たよか(あるく相談室京都、KIPP 精神分析協会)
話	題	提	供	者:	長川歩美(A&C 中ノ島心理オフィス、KIPP 精神分析協会)
指	定	討	論	者:	川畑直人(京都精神分析心理療法研究所、KIPP 精神分析協会)
司	会	者:	馬場天信(追手門学院大学、KIPP 精神分析協会)		

### 企画趣旨

『エナクトメント』とは、転移と逆転移が入り混じった形で、クライアントの過去の対人関係の有りが、『行為水準』で面接関係において『再演』されることをいう。対人関係学派ではごく初期から、クライアントの『対人関係のパターン』の反復に注目し、転移・逆転移状況における『行為水準』の相互交流に関心を抱いてきた。

こうした『エナクトメント』が治療的になりうるには、ただ単に反復するだけでなく、これまでのパターンとは異なる『新しい体験』になることが求められる。川畑は、『治療的エナクトメント』における『同形性』と『新奇性』に注目し、その『新奇性』がゆえに治療的变化が生じることを指摘している。

今回、『エナクトメント』への取り組みについて、『新奇性』・『新しい体験』という観点から考察を加えたい。まず、野原が『エナクトメント』の概念を整理し、ついで今井、長川が、事例を通してエナクトメントへの取り組みについて考察を加える。そして、川畑の指定討論によって議論を深め、全体でのディスカッションにつなげたいと考えている。

### ■「エナクトメントの基礎的理解と対人関係学派の流れ」

野原一徳(愛知淑徳大学学生相談室、KIPP 精神分析協会)

エナクトメントという言葉が聞かれて、なじみのある用語だなと感じられる方はそう多くはないのではないかと思います。この言葉が現代的な、注目される形で登場したのは、Jacobs の 1986 年の論文「逆転移エナクトメントについて」だとされています。1986 年ですから転移、抵抗や解釈といった概念よりも随分新しいものです。新しいものであるがゆえに、現在この概念の意味づけや位置づけは明確には定まっていないということがあります。私の発表は第一にこのエナクトメントという用語の基礎的な整理を目的とします。

また、精神分析のなかにおいても対人関係学派は今日エナクトメントとして注目される事態について以前から探究してきた歴史があります。対人関係論の理論的源流のひとりである Sullivan は場理論に基づき、参与観察を臨床の基本的モデルとしました。このモデルは、観察者は観察されている者と相互作用し影響を与えている、という出発点に立ちます。Sullivan 以後の対人関係論者は、知覚したり知らず知らずのうちに交流する分析家と患者とを完全に分けられているものとしては捉えず、分析的な探索の核に分析家と患者の両方を置くというアイデアを発展させてきました。

発表の構成は、はじめに用語の概説をし、そして対人関係学派の系譜をたどります。

キーワード: 現実化、参与観察、二者心理学

### ■ほしいものを手に入れることへの強い葛藤を持つ女性との面接

今井たよか(あるく相談室京都、KIPP 訓練生)

現代対人関係学派の Bromberg は、精神分析的な二人の参与者の関係を、解離された早期の情緒的惨事の影響を少しずつ縮め、「あなたのそば(the nearness of you)」に近づいていく小道を一步步歩くようなものと表現している(Bromberg, P.M.2011)。早期の情緒的惨事によって解離された自己は、エナクトメントを通して関係の場に影を現す。事例は現在 40 代の女性で、ほしいものを手に入れることに強い葛藤を持っている。面接過程では、すきまのない話し方、ほんの 2 分ほどの遅刻の連続、常に膝の上に置かれるカバンなど、微細な語り口や身ごなしの中に、あるいは、わっと泣き出す、床を踏み鳴らすなど、噴出する情緒の中に、Th を入り込ませない何かを感じられ続けた。Th は、思着せがましい父親のようにおせっかいなアドバイスを言ってしまうたり、短気な母親のように怖がられ遠ざけられたことを認められず眠気を催したりすることを繰り返した。精神分析的心理療法の訓練を通して、「安全に、しかし安全すぎず」(前掲書)体験を支える聴き方を工夫していったところ、女性は少しずつ情緒に圧倒されず言葉で思考することができるようになりつつある。切れやすい細い糸を手繰るような長期の過程について報告し、みなさんのご意見をいただきたい。

キーワード: 解離された自己、やさしさ欲求、並行過程



## ■エナクトメント状況における、セラピストの自己開示

長川歩美(A&C 中之島心理オフィス、KIPP 精神分析協会)

エナクトメントは、転移・逆転移が入り混じった形でクライアントの過去の対人関係が反復されるに過ぎないので、できるだけ陥らないように避けるべきものであるといわれることがあります。その一方で、エナクトメントはほぼ必然的に生じてくるものなので、いかに避けるべきかではなく、まずは気づくこと、それからどのように生じているのか、いかに治療的に用いることができるかということが、様々な臨床家によって論じられているようです。

そのようなエナクトメントの治療的活用の試みのひとつに、セラピストによる逆転移の自己開示が挙げられます。自己開示とは、面接場面においてセラピスト自身の感情や個人的な情報などがクライアントに伝えられるという現象で、意図しなくても自然に起きてしまう場合と、セラピストによって意図して行なわれる場合が考えられます。前者については、治療状況の中で不可避に起きてしまうものですが、後者については、学派や臨床家によってその是非がわかれるところです。

現代的な立場、特に関係論では、自己開示が是か非かということは、治療状況により様々に異なるという考えが一般的になりつつあり、ある状況では自己開示がセラピストの逆転移の治療的な処理につながるという見方がなされています。

わたしの発表では、ある事例の行き詰まりで生じたエナクトメント状況において、セラピストの逆転移を意図して開示した場面について取り上げ、『同形性』と『新奇性』という視点から考察し、その意味を振り返りたいと考えています。

キーワード:逆転移の活用、意図せざる自己開示、意図しての自己開示

## ◆個人発表

個人発表1 (2演題) 2013年12月7日(土) 10:00~12:30 (普照館 F301)  
<司会>金沢 晃(神戸外語大学、NPO 法人子どもの心理療法支援会)

### タイトル:「治療プロセスの強度としての『無限』 —レヴィナスの『忍耐』をもとにしたビオンの『無限』概念の一解釈—」

発表者: 塩飽耕規(遊心会にじクリニック)  
キーワード: ビオン、レヴィナス、無限

本論は、ビオンのいう「無限になる」という事態がどのようなものなのかを考えることを目的とする。

ビオンは『注意と解釈』のなかで、分析家は「記憶なく欲望なく理解なく」という方法を遂行して「無限にならない」という。しかし彼は、その「無限になる」という事態を面接室のなかの出来事としては説明していない。また彼は「無限」についての概念的検討すらしていない。

そこで本論では、10代後半の女性の面接中の筆者の経験をもとに、「無限になる」ということはどういうことかを考えたい。ただし本ケースは、筆者がクライアントを「記憶」しようとし「欲望」しようとし「理解」しようとして失敗し続けたケースである。つまりこの素材は、「記憶なく欲望なく理解なく」という方法を遂行していなかったが、その特異性において、一瞬「無限」を垣間みた筆者の経験である。

この一瞬垣間みられた「無限」は、エマニュエル・レヴィナスの『全体性と無限』のなかの「無限」概念を参考にすると詳細に検討できる。すなわち、それは永遠に到来しえない将来から脅かされる情動経験としての「無限」である。レヴィナスは、「忍耐」においてその「無限」は体現されるという。ビオンの考える「無限になる」とは、その「忍耐」のなかで、「記憶」も「欲望」も「理解」もできないものを対象化せず、自らの主体を失ったような状態であり続けることだと考えられる。

### タイトル:「ある『境界性パーソナリティ障害』における抑圧の構造」

発表者: 西村則昭(仁愛大学)  
キーワード: ラカン、境界性パーソナリティ障害、抑圧

ラカン派は境界例を認めない。DSMで「境界性パーソナリティ障害」と見立てられる者の多くは、ラカン派の観点からはヒステリー構造をもった神経症となるだろう。神経症ならば、そこには抑圧が見られねばならない。演者の関わったあるクライアントは、DSMの境界性パーソナリティ障害の診断基準を充たしていたが、心理療法過程において彼女の抑圧のありようが解明されていったように思われる。

本発表では、その抑圧の構造をあきらかにし、本事例がどうしていわゆる境界例の病像を呈することになったかを考えてみたい。本事例には二つの重要な抑圧が認められるように思われる。ひとつは、父との近親相姦という表象の抑圧であり、それは父に対する激しい怒りと、両腕の麻痺というヒステリー症状を生み出していた。もうひとつは、主体を神経症者として決定付けた原抑圧に相当するものである。後者の抑圧は、経歴の中で語られた、母から見捨てられる不安を防衛するために起きたある行動化によって成立し、前者の抑圧によって補強されていたと考えられる。ここでラカンがセミナーIVでおこなったハンス症例に関する議論が役立つだろう。ハンスが怖がった馬は父の名に相当し、彼の恐怖症は抑圧を成立させる試みであったと、ラカンは論じた。本事例の問題の行動化は、ハンスにとっての馬と同様、主体にとって神経症的構造を支える父の名の役割を果たすものであったと考えられる。

## タイトル:「双方エナクトメントの行く末と、扱い方の1思案」

発表者: 清川雅充(柏崎厚生病院)

キーワード: エナクトメント、至適な応答性、スムーズなゴール

演者はかつて、Freud,S.の現実的な相互交流(広義の行為化、エナクトメント)を検討したが、説明を例にとると、後期のFreudではより応答的な対応が増える。そしてこのエナクトメントは、スムーズな関係へと至っており、つまり自己対象体験を構成する情緒的な結びつきへと行き着いていると考えられる。

また、Bacal,H.A.(1998)は、エナクトメントを至適な応答性の1つに含めている。しかしエナクトメントは、行動化に捉えられる事も多く、特に「二者関係の中で展開されなかった側面が関係性の中に浮かび上る」双方のエナクトメントの状況では治療は行き詰まる。

Winnicott,D.W.は早くから非精神分析的な関係である原文のパターンや応答の意義を論じるが、この具体的な克服方法としては「表象的な直接の言及=解釈ではなく現実の経験が必要:Bromberg, P.M.」「一時的に断絶した自己対象的な結びつきは話し合いの中で修復される:富樫」「患者の視点から説明するやり方を考える:Stern,D.B.」などが参考になる。

しかし双方のエナクトメントを抜けるとは?と言うと、今1つ分かり難い。そこで演者はこれを「①Thがそれを認識して止める。Th-Clの関係をClに伝える②Clの視点からのやり方を考え、やりとりを応答的・間主観的・人間らしくし、スムーズなゴールとレパートリーに至る」と概念整理してみた。なおこのTh-Cl間の出来事は転移解釈されれば理想的かと思われる。症例も通して共有したい。

## タイトル:「治療者の正直さが問題になる場面と、治療者の中立性の危機」

発表者: 的場充憲(甲南大学大学院)

キーワード: 治療者の正直さ、治療者の中立性

心理療法においては、治療者の正直さ(authenticity)と、治療者の中立性(neutrality)が問題になる場面がある。本発表における、治療者の正直さは、治療者の中に湧き上がってくる考えや感情を治療者自身が素直に受け止め、ときに表現することを意味する。治療者の中立性は、治療者が様々な側面に対して均等に距離をとることと定義している。

治療者の自我が、治療者自身の対立する思考や感情によって分断されているとき、治療者のものの見方や感じ方の偏りとして思い込みや先入観が現れることがある。そのようなとき、治療者の正直さが問題となり、治療者の中立性も危うくなることもある。

本発表で紹介する事例の患者は恋愛に対して強い幻想を抱き、自身の恋愛の成就を過分に信じる傾向があった。そのため治療者は、彼の恋愛に関する話題においては、彼の話すことが妄想的か現実的かという問題に気を取られがちであった。そしてセッションが進む中で治療者は、彼の話が妄想的であると感ぜられる場面を幾度か経験し、おそらく彼の恋愛は成就しないだろうと思ひ込むようになった。加えて、その思い込みを、治療者は患者に悟られないように隠したのである。その結果として発表者は、彼の恋愛が成功するかもしれないという側面を無視した、中立的とは言い難い応答を患者に対して行うことになったのである。

当日は上記の例を用いて、治療者の正直さと中立性のジレンマについて論じたい。

個人発表3 (2 演題) 2013年12月7日(土)13:30~16:00 (普照館 F304)  
<司会> 飛谷 渉(大阪教育大学保健センター)

### タイトル:「総合病院精神科で行われた精神分析的心理療法の効果」

発表者: 手塚千恵子(大阪市総合医療センター)

キーワード: 精神分析的心理療法、効果研究、科学的根拠

我が国の健康保険では、医師によって実施された標準型精神分析療法とうつ病に対する認知療法・認知行動療法が診療報酬に算定されているが、その他の職種が実施した上記の心理療法や、上記以外の種類の心理療法は、薬物療法の効果研究と同じ方法論で科学的根拠をもって効果が証明されないとして、報酬算定が認められていない。

そこで文献的に精神分析的心理療法効果の科学的根拠について論じ、また臨床現場での心理療法効果研究を積み重ねる必要があると考え、当発表をその一助としたい。

当発表は、1993~2011年の間に総合病院精神科で、心因性精神障害あるいはその疑いの患者に対して、演者が行った精神分析的心理療法のうち、その有効性が認められた終結例、54症例の特性と、心理療法終結後の予後について調べたものである。

対象者の、心理療法開始時の年齢は14~74歳、男女比は1対3の割合で、薬物療法を57%が併用され、心理療法終結後も医師による薬物療法、精神療法を必要とした者は26%、治療期間中、精神科入院治療を受けた者は26%だった。心理療法期間は1週間から10年で、心理療法回数の中央値は33、平均は81だった。

予後については、心理療法終了3年以後に郵送での問い合わせや他科診療録などから得た情報で調査し、54例中38例、70%に改善維持を確認した。

### タイトル:「慢性統合失調症の心理療法」

発表者: 小高史歩(札幌佐藤病院 臨床心理科)

キーワード: 慢性統合失調症の心理療法、精神分析的接近、治療の意義

慢性状態の統合失調症患者に精神分析的接近が試みられることは稀である。むしろ、非治療的であるとさえ言われることがある。しかしながら今回、病院臨床において、あえて対象関係論的コンセプトによる心理療法的接近を試みた。

事例は面接開始当初56歳の女性Aである。Aは知的に低下し、日常生活能力も崩壊した解体状態にあった。当時の主治医の意向で、閉鎖病棟病室での週1回20分の心理療法が導入された(計149回)。面接の経過とともに、Aの病室には、治療者(以下、Th)のピンク色の手帳と同色の所有物が増え、Thの胸元にささっているペンをうらめしそうに見ては欲しがったが、直後には「侵される!」と激しい恐怖や怒りを吐き出すことを繰り返した。AはThに同一化し原始的な羨望を向け続けたが、同時に心は纏まりを見せていった。また創造的な力が刺激され、人間的で活き活きとした側面が息を吹き返していった。その後、Aが「帝王切開時に赤ちゃんが切られて死んだ」という内的体験に触れたことをきっかけに、Aは急速に現実感を回復させていった。Aは拒否し続けた退院に同意したものの、退院後も継続予定であった心理療法は外的な要因から突然の中断を迎えた。“胎児の死”は否認されてThの中に押し込まれ、Thとの関係は終わりを迎えた。Aとの心理療法過程から、Thはこのような一群の患者への精神分析的接近が有意義であると考えた。

個人発表4 (2 演題) 2013年12月8日(日)10:00~12:30 (普照館 F304)  
<司会>平井正三(御池心理療法センター、NPO 法人子どもの心理療法支援会)

**タイトル:「人形遊び技法における面接者の介入による児童の反応の推移  
～面接者と児童の相互作用から捉えた反応の共同構築過程～」**

発表者: 石谷真一(神戸女学院大学)  
キーワード: 人形遊び技法、面接者の介入、反応の共同構築

筆者は前大会において「人形遊び技法による就学前児童の発達水準と表象世界の評価」の個人発表を行い、人形遊び技法を紹介するとともに児童の反応を発達の観点と心理力動的(表象的)観点の両面から捉える必要性を述べた。しかし児童の課題への取り組みと産出された反応は、面接者と児童とが相互に相手の反応や介入に影響を及ぼしあう相互作用と共同構築の産物として捉えてこそ的確に理解できるものであり、そうしたプロセスの産物として見て初めて児童の発達水準や表象世界も適切に評価しうると考える。従来の人形遊び技法の評価には相互作用や共同構築の観点があまり反映されておらず、豊かな臨床的意味合いを十分に汲み取れていないように思われる。本発表ではまず人形遊び技法と筆者の取り組みを簡単に紹介した後、検討素材として、面接者の介入とそれによる児童の反応の推移の例を幾つか提示し、両者の相互作用について検討する。その上で児童の取り組み、すなわち課題によって引き起こされた心理的葛藤や不安への対処を支え促す面接者の介入の意義を考察する。こうした観点は、力動的な(プレイ)セラピーでのクライアントとセラピストとの相互作用プロセスの微視的な検討や、力動指向の心理臨床家の養成にも役立てられるものと考えられる。

**タイトル:「モーニングワークと分離の事実」**

発表者: 疋田基道(クリニックソフィア)  
キーワード: 分離の事実、モーニングワーク、無力感

大切な人を喪うことは遺された者に大きな心的苦痛をもたらす。それは遺された者に分離の事実を突き付ける。今回私は、ペニスの異常への不安を訴える、母親を自殺により喪った男子大学生の精神分析的心理療法を経験した。そのプロセスにおいて以下のことが明らかになっていった。それは、喪った母親への同一化、自らが母親の死を招いたという罪悪感、自らの男性性や攻撃性への不安、母親を救えなかった無力感とその否認としてのアニミズム的思考や強迫症状等である。また、それらの苦痛な感情は投影同一化を介して強力に私に投げ込まれ、その理解と解釈を通してモーニングワークは徐々に進展していった。

その進展の先に私が直面したことは次のことであった。それはクライアントと私は異なる人間ゆえに、クライアントの苦しみを私は真に体験することも理解することもできず、クライアントを救うことはできないという無力感であった。その無力感こそが、クライアントの真の苦しみという逆説がそこにあった。それは私にとって分離の事実への直面でもあった。その事実を受け入れた上で、それまでと同様に、私の理解を解釈として伝えるというセラピストとしての私の営みを一貫して維持できたことがさらなる心理療法の進展をもたらした。

この事例を通し、分離しているが故の対象の不可知性、分離した他者であることを求めるクライアントの無意識的な期待等について考察を深めていきたい。